

言 語 障 害

1 言語障害とは

言語障害は、言語情報の伝達及び処理過程における様々な障害を包括する広範な概念である。一般的には、言語の受容から表出に至るまでのいずれかのレベルにおいて障害がある状態であり、その実態は複雑多岐にわたっている。言語機能の成立にかかわる要素は広範で、運動機能や思考、社会性の発達などとのかかわりも深く、言語障害を単一の機能の障害として定義することは困難である。

しかしながら、具体的にその状態を示すとすれば、その社会の一般の聞き手にとって、言葉そのものに注意が引かれるような話し方をする状態及びそのために本人が社会的不都合を帰するような状態であるといえる。こうした場合、言語の意味理解や言語概念の形成などの面に困難を伴うことも考えられる。

2 言語障害の分類

言語障害については、一般に、次のような基準で分類されることが多い。

(1) 耳で聞いた特徴に基づく分類

発音の誤り、吃音など

(2) 言葉の発達という観点からの分類

話す、聞くなど言語機能の基礎的事項の発達の遅れ

(3) 原因による分類

口蓋裂、聴覚障害、脳性まひなど

3 言語障害児童生徒の教育の場

口蓋裂、構音器官のまひなど、器質的又は機能的な構音障害のある児童生徒、吃音等話し言葉におけるリズムの障害のある児童生徒、話す、聞くなど言語機能の基礎的事項に発達の遅れがある児童生徒、その他これに準ずる者（これらの障害が主として他の障害に起因するものでない者に限る。）で、その程度が著しい児童生徒については、言語障害特別支援学級の対象となる。

また、口蓋裂、構音器官のまひなど器質的又は機能的な構音障害のある児童生徒、吃音等話し言葉におけるリズムの障害のある児童生徒、話す、聞くなど言語機能の基礎的事項に発達の遅れがある児童生徒、その他これに準ずる者（これらの障害が主として他の障害に起因するものでない者に限る。）で、通常の学級での学習におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とする児童生徒については、通級による指導の対象者となる。言語障害の通級指導教室では、通常の学級に在籍している児童生徒に対して、障害の改善を図るために、週に1～2回程度、基本的には言葉に関する個別指導が行われている。

4 情報収集及び実態把握の視点

(1) 構音障害

- ア 語頭・語中・語尾のどこで誤って発音するか（誤りの一貫性の検査）。
- イ 省略・置き換え・ひずみ・付加のどれか（誤りのタイプの検査）。
- ウ 検査者の構音をどの程度正しく模倣できるか（被刺激性の検査）。
- エ 音を正しく聞き分けることができるか（語音弁別力検査）。
- オ 耳から聞いた音や数字をどの程度復唱する力があるか（聴覚的記銘力検査）。

(2) 吃音

- ア 吃音の頻度や一貫性・適応性はどうか。
- イ 生育歴，家族環境，親子関係などはどうか。
- ウ 本人は意識しているか，また随伴症状はないか。

(3) 言語発達遅滞

- ア 身体，認知面，人とのかかわり，聴力などの全体的な発達の状態はどうか。
- イ 口腔器官の様子はどうか。
- ウ 発声・発語はあるか。
- エ 言語理解の程度はどれくらいか。

5 具体的な援助のポイント

(1) 構音障害

- ア 呼吸器官や口腔器官の機能を高めるための基本的な練習をする。かむ，吸う，飲み込む（C : chewing, S : sucking, S : swallowing），吹く（B : blowing）などの機能を高めるために，風船をふくらませたり，ガムをかんだり，舌の体操を行ったりする。
- イ 音の弁別練習をする。指導者の発する音の弁別，自分と指導者の発する音の弁別，自分の発する音の弁別と段階を踏んで行う。
- ウ 発音の練習をする。目的の音ができるだけ多く発音されるような場面を設定し，意欲的に練習に取り組めるように励ます。
- エ 発音の定着を図る。どんな場面でも，いかなる位置（語頭・語中・語尾）でも正しい音になるように一般化・安定を目指す。

(2) 吃音

- ア 「ゆっくり話さない」，「落ち着いて」，「もう一度言ってごらん」などの注意や激励を控え，話すことそのものに対するこだわりを高めない。
- イ 話しやすい雰囲気をつくり，ゆったりと対応する。
- ウ 話す機会を増やし，十分話すことができたという満足感をもたせる。
- エ すべてに伸び伸びと行動できるように配慮する。
- オ 自信をもって話せるように，遊戯療法やカウンセリングなどを行う。
- カ 斉読，模唱など音読練習をする。
- キ 意図的に音を重ねたり伸ばしたりして話させ，つかえることに対する抵抗をな

くす。

ク 言葉を言いやすくする工夫や、話し方の速度を調整する。

(3) 言語発達遅滞

ア 遊びを通して模倣する力を育てたり、呼吸器官・発声器官の機能を高めたりする。

イ 表現意欲・伝達意欲を引き出すような場を設定する。

ウ 体験を通して、発見や感動を言葉に結び付ける。

エ 場や状況に応じて言葉を広げて返したり、言葉のモデルを示したりする。

※ 口腔器官や聴覚などの障害が疑われる場合は、口腔外科や耳鼻咽喉科などの診断を受けた上で、教育機関に相談する。